

カーライル博物館

夏目漱石

青空文庫

公園の片隅に通りがかりの人を相手に演説をしている者がある。向うから来た釜形かまがたの尖った帽子とがを被かずいて古ぼけた外套がいとうを猫背ねこぜに着た爺さんじいがそこへ歩みを佇とどめて演説者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつかつかとこの村夫子そんぶうしのたたずめる前に出て来る。二人の視線がひたと行き当る。演説者は濁りたる田舎いなかぢ調子ようしにて御前はカーライルじゃと問う。いかにもわしはカーライルじゃと村夫子が答える。チエルシーの哲人セージと人が言いいは囃やすのは御前の事かと問う。なるほど世間ではわしの事をチエルシーの哲人セージと云うようじゃ。セージと云うは鳥の名だに、人間のセージとは珍らしいなと演説者はからからと笑う。村夫子はな

るほど猫も杓子しゃくしも同じ人間じやのにことさらに哲人セージなどと異い名うをつけるのは、あれは鳥じやと渾名あだなすると同じようなものだのう。人間はやはり当り前の人間で善よかりそうなものだのに。と答えてこれもからからと笑う。

余は晚餐前に公園を散歩するたびに川縁かわべりの椅子いすに腰を卸して向側ながを眺める。倫敦ロンドンに固有なる濃霧はことに岸边に多い。余が桜の杖に頤あごを支えて真正面を見ていると、遙はるかに対岸の往來おうらいを這はい廻る霧の影は次第に濃くなって五階立だての町続きの下からぜんぜんこの揺曳たなびくものの裏うちに薄れ去つて来る。しまいには遠き未来の世を眼前に引き出いだしたるように窈然ようぜんたる空の中にとりとめをつかぬ鳶色とびいろの影が残る。その時この鳶色の奥にぽたりぽたりと

鈍き光りが滴^{したた}るように見え初める。三層四層五層共^{とも}に瓦斯^{ガス}を点じたのである。余は桜の杖をついて下宿の方へ帰る。帰る時必ずカーライルと演説使いの話しを思いだす。かの溟濛^{めいもう}たる瓦斯の霧に混ずる所が往時この村夫子^{そんぷうし}の住んでおったチエルシーなのである。

カーライルはおらぬ。演説者も死んだであろう。しかしチエルシーは以前のごとく存在^いしている。否^{いな}彼の多年住み古した家屋敷さえ今なお儼然^{げんぜん}と保存せられてある。千七百八年チエイン・ロウが出来てより以来幾多の主人を迎え幾多の主人を送ったかは知らぬがとにかく今日^{こんにち}まで昔のままで残っている。カーライルの歿^{ほつき}後は有志家の発起^{ほつき}で彼の生前使用したる器物調度図書典籍^{あつ}を蒐

めてこれを各室に按排あんばいし好事こうずのものにはいつでも縦覧じゅうらんせしむる便宜べんぎさえ謀はかられた。

文学者でチエルシーに縁故のあるものを挙あげると昔むかしはトマス・モア、下くだつてスモレット、なお下つてカーライルと同時代にはリ・ハントなどがもつとも著名である。ハントの家はカーライルの直近傍じきで、現にカーライルがこの家いえに引き移つた晩尋ねて来たという事がカーライルの記録そごうに書いてある。またハントがカーライルの細君にシエレーの塑像そざうを贈つたという事も知れている。このほかにエリオットのおつた家とロセツチの住んだ邸やしきがすぐ傍そばの川端に向いた通りにある。しかしこれらは皆すでに代だいがかわつて現に人が這入はいつてゐるから見物は出来ぬ。ただカーライルの旧きゆう

廬のみは六ペンスを払えば何人でもまた何時でも随意に觀覽が出来る。

チエイン・ローは河岸端の往来を南に折れる小路でカーライルの家はその右側の中頃に在る。番地は二十四番地だ。

毎日のように川を隔てて霧の中にチエルシーを眺めた余はある朝ついに橋を渡つてその有名なる庵りを叩いた。

庵りというと物寂びた感じがある。少なくとも瀟洒とか風流とかいう念と伴う。しかしカーライルの庵はそんな脂っこい華奢なものではない。往来から直ちに戸が敲けるほどの道傍に建てられた四階造の真四角な家である。

出張った所も引き込んだ所もないのべつに真直に立っている。

まるで大製造場の煙突の根本を切つてきてこれに天井を張つて窓をつけたように見える。

これが彼が北の田舎いなかから始めて倫敦ロンドンへ出て来て探しに探し抜

いて漸々ようようの事で探し宛あてた家である。彼は西を探し南を探しハ

ンプステッドの北まで探してついに恰好かつこうの家を探し出す事が出

来ず、最後にチエイン・ローへ来てこの家を見てもまだすぐとりに取

きめるほどの勇氣はなかつたのである。四千万の愚物ぐぶつと天下ののしを罵

つた彼も住家すみかには閉口したと見えて、その愚物の中に当然勘定せ

らるべき妻君へ向けて委細を報知してその意向を確めた。細君の

答に「御申越しやくやの借家は二軒共不都合もなき様被ぞんぜられ存候えば私

倫敦のぼへ上のぼり候迄そろまで双方共御明け置願度おきねがいたくも若し又それ迄に取極め

候そろ必要相生じ候そろせつ節は御一存にて如何いかがとも御取計らい被下度くだされたくそ
 候ろとあつた。カーライルは書物の上でこそ自分独りひとわかつたよ
 うな事をいうが、家をきめるには細君の助けに依らなくては駄目
 と覚悟をしたものと見えて、夫人の上京するまで手を束ねつかて待っ
 ていた。四五日しごんちすると夫人が来る。そこで今度は二人してまた東
 西南北を馳かけ廻はてつた揚句の果やはりチエイン・ローが善いいという
 事になった。両人ふたりがここに引き越したのは千八百三十四年の六月
 十日で、引越の途中に下女の持っていたカナリヤが籠かごの中で囀さえずつ
 たという事まで知れている。夫人がこの家を撰えらんだのは大おおに氣に
 入ったものかほかに相当なのがなくてやむをえなんだのか、いず
 れにもせよこの煙突のごとく四角な家は年に三百五十円の家賃を

もつてこの新世帯の夫婦を迎えたのである。カーライルはこのクロムウエルのごときフレデリック大王のごときまた製造場の煙突のごとき家の中でクロムウエルを著わしフレデリック大王を著わしデイスレリーの周しゅうせん旋せんにかかる年給しりぞを擯けて四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立つて鬼の面のノツカーをコツと敲たたく。しばらくすると内から五十かつこう恰かつこう好の肥った婆さんが出て来て御這おはい入りと云う。最初から見物人と思っっているらしい。婆さんはやがて名簿のようなものを出して御名前をと云う。余は倫敦滞留中四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある。この時は実に余の名の記きにゆうはじめ入初であつた。なるべ

く丁寧に書くつもりであつたが例に因^よつてはなはだ見苦しい字が出来上つた。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でここへ来たのは余が始めてだなど下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云うから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。これは昔し客間であつたそうだ。色々なものが並べてある。壁に画^えやら写真やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像のようだ。後^{うし}ろの部屋にカーライルの意匠に成つたという書棚がある。それに書物が沢山詰まっている。むずかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。読めそうもない本がある。そのほかにカーライルの八十の誕生日の記念のために鑄^いたという銀^{ぎんぱい}牌と銅^{どうはい}牌がある。金^{きんぱい}牌は一つもなか

ったようだ。すべての牌はいと名のつくものがむやみにかちかちしていつまでも平気に残っているのを、もろうた者の煙のごとき寿命と対照して考えると妙な感じがする。それから二階へ上る。ここにまた大きな本棚があつて本が例のごとくいっぱい詰まっている。やはり読めそうもない本、聞いた事のなさそうな本、入りそうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。この部屋も一時は客間になつておつたそうだ。ビスマークがカーライルに送った手紙と普露プロシア西の勲章がある。フレデリック大王伝の御蔭と見える。細君の用いた寝台ねだいがある。すこぶる不器用な飾りかざり気けのないものである。

案内者はいずれの国でも同じものと見える。先さつきから婆さん

は室内の絵画器具について一々説明を与える。五十年間案内者を専門に修業したものであるまいが非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたこうしたとあたかも口から出任せに喋舌でまかつていようである。しかもその流暢りゅうちょうな弁舌に抑揚があり節せ奏そうがある。調子が面白いからその方ばかり聴いていると何を言っているのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問い返したりして見たがしまいには面倒になったから御前は御前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するからという態度をとった。婆さんは人が聞こうが聞くまいが口上だけは必ず述べますという風で別段厭あきた景色けしきもなく怠おこたる様子もなく何年何月何日をやっている。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪ほどの庭がある。右も左もまた向うも石の高塀たかかべで仕切られてその形はやはり四角である。四角はどこまでもこの家の附属物かと思う。カーライルの顔は決して四角ではなかった。彼はむしろ懸崖けんがいの中途が陥落して草原の上に伏しかかったような容貌ようぼうであつた。細君は上出来の辣蕪らつきようのように見受けらるる。

今余の案内をしている婆さんはあんばんのごとく丸まるい。余が婆さんの顔を見てなるほど丸いなと思うとき婆さんはまた何年何月何日を誦じゆし出した。余は再び窓から首を出した。

カーライル云う。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株みど、碧みどりりなる野原、及びその間に点綴てんてつする勾配こうばいの急なる赤き

屋根のみ。西風の吹くこの頃の眺めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見ようと思い、青き野を眺めようと思うて実は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二返ばかり出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左りに家が見える。向にも家が見える。その上には鉛色の空が一面に胃病やみのように不精無精に垂れかかっているのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の続きを朗らかに読誦している。

カーライルまた云う倫敦の方を見れば眼に入るものはウエストミンスター・アベールとセント・ポールズの高塔の頂きのみ。その他幻のごとき殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隠見す。

「倫敦の方」とはすでに時代後れの話である。今日こんにちチエルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中うちに坐つて家の方かたを見ると同じ理窟くつで、自分の眼で自分の見当けんとうを眺めると云うのと大した差違はない。しかしカーライルは自らみずか倫敦に住んでいるとは思わなかったのである。彼は田舎いなかに閑居して都の中央にある大伽藍だいがらんを遙はるかに眺めたつもりであつた。余は三度みたび首を出した。そして彼のいわゆる「倫敦の方」へと視線を延ばした。しかしウエストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。数万の家、数十万の人、数百万の物音は余と堂宇との間に立ちつつある、濛ただよいっつある、動きつつある。千八百三十四年のチエルシーと今日のチエルシーとはまるで別物である。余はまた首を引き込めた。婆さんは

默然^{もくねん}として余の背後に佇立^{ちよりつ}している。

三階^{あが}に上る。部屋の隅を見ると冷やかにカーライルの寝台^{ねだい}が横わっている。青き戸帳^{とばり}が物静かに垂れて空^{むな}しき臥床^{ふしど}の裡^{うち}は寂然^{せきぜん}として薄暗い。木は何の木か知らぬが細工^{さいく}はただ無器用で素朴であるというほかに何らの特色もない。その上に身を横えた人の身の上も思い合^あわさる。傍^{かたわ}らには彼が平生使用した風呂桶^{ふろおけ}が九鼎^{きゅうてい}のごとく尊^{たう}げに置かれてある。

風呂桶とはいうもののバケツの大きいものに過ぎぬ。彼がこの大鍋^{おおなべ}の中で倫敦の煤^{すす}を洗い落したかと思うとますますその人となり^しが偲^{しの}ばる。ふと首を上げると壁の上に彼が往^{おう}生^{じよう}した時に取ったという漆喰^{しつくい}製の面型^{めんけい}がある。この顔だなど思う。この

炬燵こたげぐら檜ぐらぐらいの高さの風呂に入はいつてこの質素な寝台の上に寝て四十年間やかましい小言こごとを吐き続けに吐いた顔はこれだなど思う。婆さんの淀よどみなき口上が電話口で横浜の人の挨拶を聞くように聞える。

宜よろしければ上りましょうと婆さんがいう。余はすでに倫敦ちんの塵ちりと音を遥はるかの下界に残して五重の塔の天て辺ぺんに独坐するような気分がしているのに耳の元で「上りましょう」という催促を受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思った。さあ上ろうと同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りそうであるから。

四階へ来た時は縹ひょうびょう渺びょうとして何事とも知らず嬉しかった。嬉しいというよりはどことなく妙であった。ここは屋根裏である。

天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣たてがみのごとき形かたちをしてその一番高い背筋せすじを通して硝子張りの明り取りが着いている。このアチツクに洩もれて来る光線は皆頭の上から真直まっすぐに這入はいる。そうしてその頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空である。眼に遮さえぎるものは微塵みじんもない。カーライルは自分の経営でこの室しつを作った。作ってこれを書斎とした。書斎としてここに立籠たてこもった。立籠って見て始めてわが計画の非なる事を悟った。夏は暑くておりにくく、冬は寒くておりにくい。案内者は朗読的にここまで述べて余を顧かえりみた。真丸まんまるな顔の底に笑の影が見える。余は無言のままうなずく。

カーライルは何のためにこの天に近き一室の経営に苦心したか。

彼は彼の文章の示すごとく電光的人であつた。彼の癩癰かんぺきは彼の身边をいによう圍繞して無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作にふけ耽るの余裕を与えなかつたと見える。洋琴ピアノの聲、犬の聲、鶏の聲、鸚鵡おうむの聲、いっさいの聲はことごとく彼の鋭敏なる神経を刺激して懊惱おうのうやむ能わあたざらしめたる極きよくついに彼をして天に最も近く人にもつとも遠ざかれる住居をこの四階の天井裏に求めしめたのである。

彼のエイトキン夫人に与えたる書翰しょかんにいう「此夏なつじゅう中は開け放ちたる窓より聞ゆる物音に悩まされ候事そろこと一方ひとかたならず色々修繕も試み候えども寸毫すんごうも利目ききめ無之これなくそれ夫より篤とくと熟考の末家の真上に二十尺四方の部屋を建築致す事に取極め申候そろ是は壁を二重

に致し光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもつて差さ支しかえなき様致す仕掛に候えそろば出来上り候上たといは仮令天下の鶏共一時ときに鬨とぎの声を揚げ候そろとも閉口仕らざる積つままつに御座候そろ」

かくのごとく予期せられたる書齋は二千円の費用にてまづまづ思い通りに落成を告げて予期通りの効果を奏したがこれと同時に思い掛けなき障害がまたも主人公の耳辺じへんに起つた。なるほど洋琴ピアノの音ねもやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡カカの声も案のごとく聞えなくなつたが下層にいるときは考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車ふえの笛ふえさては何とも知れず遠きより来る下界きたの声のろいが呪のごとく彼を追いかけて旧のごとくに彼の神経を苦しめた。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声は独逸ドイツにおいてシ

ヨペンハウアを苦しめたる声である。シヨペンハウア云う。「
ントは活力論あらわを著せり、余は反かえつて活力とむらを弔う文を草せんとす。
物を打つ音、物をたた敲く音、物のころろ転がる音は皆活力の濫用にして余
はこれがために日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何らの感
をも起さざる多数の人我わがせつ説わがせつをきかば笑うべし。されど世に理窟りくつ
をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌しいかをも感ぜず美術をも感ぜざるもの
あらば、そは正ただにこの輩やからなる事を忘るるなかれ。彼らの頭腦の組
織はそこう麁獷さつにして覚さとり鈍き事その源因たるは疑ううべからず」カーラ
イルとシヨペンハウアとは実は十九世紀の好こう一いつ対ついである。余が
かくのごとく回想うなしつつあつた時に例の婆さんがどうです下りま
しょうかと促うながす。

一層を下るくだごとに下界に近づくような心持ちがする。冥想めいそうの
 皮が剥はげることく感ぜらるる。階段を降り切つて最下の欄干に倚よ
 つて通りを眺ながめた時にはついに依然たる一個の俗人となり了おわつて
 しまった。案内者は平氣な顔をして厨くりやを御覽なさいという。厨は
 往來おうらいよりも下にある。今余が立ちつつある所よりまた五六段の
 階を下らねばならぬ。これは今案内をしている婆さんの住居すまいにな
 っている。隅に大きな竈かまどがある。婆さんは例の朗読調をもつて
 「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカー
 ライルを訪問した時彼ら兩人はこの竈の前に対坐して互に煙草たばこを
 燻くゆらすのみにて二時間の間一ひとこと言も交えなかつたのであります」
 という。天上に在あつて音響いとうを厭いといたる彼は地下に入つても沈黙を

愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話しによると昔は桜もあつた、葡萄ぶどうもあつた。胡桃くるみもあつたそうだ。カーライルの細君はある年二十五錢ばかりの胡桃を得たそうだ。婆さん云う「庭の東南の隅を去る五尺余の地下にはカーライルの愛犬ニロが葬むられております。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も当時は存しておりましたが惜しいかなその後取払われました」と中々精くわしい。

カーライルが麦藁帽むぎわらぼうを阿弥陀あみだに被かぶつて寝巻姿のまま唧くわえ煙管ぎせるで逍遙しょうようしたのはこの庭園である。夏の最中もなかには蔭深き敷石の

上にささやかなる天幕テントを張りその下に机をさえ出して余念もなく述作に従事したのはこの庭園である。星明あきらかなる夜最後よの一ぷくをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼余が最後に汝なんじを見るの時は瞬刻のちの後ならん。全能の神が造れる無辺大の劇場、眼に入る無限、手に触ふるる無限、これもまた我が眉目を掠かすめて去らん。しかして余はついにそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虚ならず、知らんと欲するや切なり。しかもわが知識はただかくのごとく微びなり」と叫んだのもこの庭園である。

余は婆さんの労に酬むくゆるために婆さんの掌てのひらの上に一いっ片ぺんの銀貨を載のせた。ありがとうと云う声さえも朗読的であつた。一時間の後ロンドン倫敦ちりの塵すすと煤と車馬の音とテームス河とはカーライルの家を

別世界のごとく遠き方^{かた}へと隔^{へだ}てた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000年8月31日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カーライル博物館

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>